

学会だより No. 87 2008年6月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3801 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788

第68回哲学会大会のお知らせ

今夏は下記の要領で第68回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえ
ご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2008年7月5日（土） 13：30～17：00

会場：上智大学7号館14階特別会議室

プログラム

研究発表 13：30～15：30

赤塚弘之（本学博士前期課程）

若きハイデガーによる歴史についての考察

安齋昌宏（本学博士後期課程）

超越論的自由について

小島優子（國學院大学兼任講師）

ヘーゲル『精神現象学』における「想起」と言葉について

講演 15：45～16：45

土橋茂樹（中央大学教授）

三位一体論をめぐるバシレイオス エウノミオス論争と固有名の問題

懇親会 17：30～19：30

会場：上智大学11号館7階第3会議室

会費：3,000円

講演要旨

三位一体論をめぐるバシレイオス エウノミオス論争と固有名の問題

土橋茂樹（中央大学教授）

J・S・ミル以降、指示と記述の問題をめぐるフレーゲ、ラッセル、クリプキ、サールらの間で展開されていった議論の蓄積は、意味論という枠には収まり切らぬほど多様かつ独創的であり、哲学的思索の宝庫といっても過言ではない。とりわけ固有名というトリックスターが担う役割は、そのシンプルな見かけとは裏腹に、思いのほか深く遠い射程を蔵しているようである。本発表では、現代的な意味論に深入りするのではなく、あくまで補助線として利用しつつ、その古代哲学バージョンとして、名をめぐるプラトン、アリストテレス、ストア派らによる論理的考察をまず基礎編として跡付け、しかる後にカイサレイアのバシレイオスによる三位一体論形成途上における論敵との知的格闘の書『エウノミオス駁論』をその発展編として取り上げるつもりである。

そもそも 379 年に早過ぎた死を迎えるまで、ニカリア信条を支持する立場から正統教義の確立に向けて絶えず主導的役割を担い続けたバシレイオスにとって、キュジコスのエウノミオスは数多い論敵の中でも最大の存在であった。ギリシア哲学の本流に棹さした合理的な思考法によって、あくまで父と子の非相似（アノモイオス）を主張し従属説をとるエウノミオスに対して、両者の位格がそれぞれ唯一特異な個体として自存しつつ、ホモウーシオス（同一本質）として統一されると説くバシレイオスの主張は、確かに多くの論点で対立を顕にしている。そうした対立する論点の一つとして、名の分類とその名指しの問題が見出される。今回、議論の俎上にのせるために苦心して捌いているのがまさにそのネタである。古代ギリシア哲学とキリスト教神学、さらに現代論理学が交錯する場で何か面白い話ができれば幸いである。

研究発表要旨

若きハイデガーによる歴史についての考察

赤塚弘之（本学博士前期課程）

本発表では、1916 年の試験講義「歴史科学 Geschichts Wissenschaft における時間概念」と、全集 56/57 巻に収められている 1919 年度の講義を中心に、1910 年代において若きハイデガーが歴史をどのように捉えていたかを探っていく。

1916 年の試験講義においてハイデガーは、歴史科学を問題にしている。この講義では、歴史科学における時間概念と自然科学の時間概念を比較するという通して、歴史科学の独自性を明らかにしようとした。このように諸科学における概念上の比較ということに関して、八

ハイデガーはリッケルトやディルタイが行おうとした自然科学と精神科学の境界区分を前提にしている。さらに、ハイデガーは歴史科学の目標を、「生を客体化し、文化価値との関係においてその唯一性および一回性を叙述することである」と規定している。このように歴史叙述を価値関係と結びつけているということからしても、この講義ではまだリッケルトの影響が大きいということが伺われる。そして、1919年の夏学期講義『現象学と超越論的価値哲学』においては、ハイデガー自らが、上述のように歴史叙述を価値連関へと結びつけるリッケルトに見られる超越論的価値哲学と歴史科学の関係について、批判的に解明した。

それに対して1919年の他の二つの講義において、ハイデガーは「歴史的 historisch な生」、あるいは「歴史的な自我」と述べているように、人間の生そのものに歴史が属していると指摘している。つまり、歴史科学の方法論を含む理論的な認識に先立って、すでに人間の生が歴史的存在であるということを示しているのである。そして、そこで根源学 Urwissenschaft として規定可能なものとされる哲学は、まさにこのような原初的で歴史的な生のもとで、歴史的な生の体験連関を明らかにしようとする営みであるということを示そうとした。また根源学としての哲学の歴史的な生への問いも、歴史的な生そのものから発現してくるのである。

このように、文化的な客体としての「歴史 Geschichte」へ学的に関わることから、根源的な生に根ざしたものである「歴史的である historisch」ということの洞察へと到った、若きハイデガーが歩んだ思索の変遷を本発表においては探っていきたい。

*

ヘーゲル『精神現象学』における「想起」と言葉について

小島優子（國學院大学兼任講師）

本発表では、『精神現象学』「宗教」章、および「絶対知」章を中心として、ヘーゲルにおける「想起（Erinnerung）」の意味について明らかにしたい。ヘーゲルの「想起」概念を「言葉」との関わりから考察することを試みる。通常、自己意識の「外化」に関する研究はなされるが、自己意識の「想起」に関する研究は少なく、従来の研究においては、「想起」と「言葉」との関係に関する考察も不足している。このために、これまで研究されてこなかった言葉との関連から、ヘーゲルの「想起」概念を考察する。

通常、想起とは、別の機会に既に獲得した考えを再現するという意味にとられる。それに対してヘーゲルによると「想起」は、精神がそのつど自己を外化しながら自己自身へと生成してゆく否定の運動を通して、この主体を構成する諸契機が「自らのうちへ行くこと」、すなわち「内化」であり、自己自身への還帰と捉えられる。

精神は自らを「外化」し、自らを限界づけ犠牲にし、そのことを通して自らが何であるかを

学ぶ。この際に、意識にとっては、新しい形式を得るたびに先行の経験は忘れ去られる。しかし、精神は何も学ばなかったのではなく、意識の諸形態のより一段高い段階の中に諸々の経験を保存し記憶に収めており、「外化」と「内化」は伴って現れてくる。

「宗教」章では、イエスは死ぬことによって「自然的な定在」を「外化」し、人間的な身体性を失う。このことによって教団の中でイエスの生涯は人々の「記憶」にとどめられる精神的なものとして「内化」されうる。ここにおいて、イエスの死による<非 - 精神性>の「外化」と、精神的なものへの「内化」は一致している。

精神は我々が発話し、行動するところに意識として現象してくる。「想起」とは我々が自身の行動や発言を放置したままにするのではなく、言葉を用いてその経験を意味づけることによって、より高次の段階に保持することである。このような意味において、ヘーゲルの「想起」とは外的な世界と自らとを精神化し、精神の内奥にまで迫っていくこととみなすことができる。